

4. 第3回和漢薬研究所夏期セミナー「和漢薬への招待」

第3回和漢薬研究所夏期セミナーは平成10年8月25日から27日にかけてインテック大山研修センターにて行われた。参加者は学生が45名、一般10名の55名であり、それに講師10名、実行委員13名を加えると総数78名であった。過去2回に比べ今回は人数的にはかなり増加していた。毎回参加している徳島文理大薬学部の先生の影響であろうが、同大学から8名の学生の参加は、医薬大学生21名に次ぐ多数参加であった。参加者の中には医師として医療に携わっている人、大学職員、薬種商に勤めている人達もおり、和漢薬に対する知識もまちまちであった。

大学初年度の学生から一般まで、それぞれの興味、知識、理解度に大差があり、講義内容に苦労した。過去2回まではサブタイトルが「和漢薬にふれる」であったが、今年は「和漢薬への招待」とし、特に、漢方医学を理解していただくために、「わかり易い漢方処方解説」「わかりやすい傷寒論」の講義を初日に設けた。また、漢方処方に注目して、「腎疾患と温脾湯」「葛根湯はなぜ効く」の講義を企画した。その他、「癌と和漢薬」では薬用人参の代謝成分が癌転移の防止に有効であるとの最近の研究成果の一端をわかりやすく解説してもらった。2日目は「伝統医学と民族薬物を探る」と題し、本学名誉教授の難波恒雄先生に中国医学に限らず、他の伝統医学の紹介をしてもらった。午後からは「あなたにもできる和漢薬鑑定」「漢方薬作りを体験しよう」で、実際に参加者が生薬に触れ、代表的な漢方処方に入っている生薬を同定したり、当帰の修治、桂枝茯苓丸の調製を実際におこなった。このほか、夕食後の和漢薬談義では寺澤捷年先生に「東西医学融合の試み」、田代眞一先生に「漢方薬理学研究の方法論と技術」と題し、話をうかがった。この談義は軽いスナック、ビールやジュースを飲食しながら和やかな雰囲気でおこなわれ、聴講生との種々な意見交換も活発であった。談義終了後はさらに談話室に集り、研究所および講師の先生方を囲み、和気あいあいとした集いとなった。

8月27日は、希望者だけ富山医科薬科大学まで案内し、研究所や民族薬物資料館の見学コースを設定したが予想外（40名ほど）の参加者があった。以下、当日行われた日程表を示す。

第1日目：8月25日（火）

1. 開講挨拶

和漢薬研究所長 教授 渡邊裕司

2. 研究所紹介

和漢薬研究所 教授 服部征雄

3. 講義「わかり易い漢方処方解説」

和漢薬研究所 資源開発部門 教授 谿 忠人

4. 講義「癌と和漢薬」

和漢薬研究所 病態生化学部門 教授 濟木育夫

5. 講義「わかり易い傷寒論」

富山医科薬科大学・医学部 和漢診療学 助教授 伊藤 隆

6. 和漢薬談義 「東西医学融合の試み」

富山医科薬科大学・医学部 和漢診療学 教授 寺澤捷年

第2日目：8月26日（水）

7. 講義 「腎臓疾患と温脾湯」
和漢薬研究所 細胞資源工学部門 助教授 横澤隆子
8. 講義 「葛根湯はなぜ効く」
富山医科薬科大学・医学部 ウイルス学 教授 白木公康
9. 講義 「伝統医学と民族薬物を探るーフィールドワークの楽しさ厳しさー」
富山医科薬科大学 名誉教授 難波恒雄
10. 体験実習「あなたにもできる和漢薬鑑定」
和漢薬研究所 附属薬効解析センター 助教授 小松かつ子
11. 体験実習「漢方薬をつくってみよう」
和漢薬研究所 資源開発部門 助手 山路誠一
12. 和漢薬談義「漢方薬理学研究の方法論と技術ー漢方薬研究への新展開ー」
昭和薬科大学 病態科学 教授 田代眞一

第3日目：8月27日（木）

和漢薬研究所および民族薬物資料館見学

文責（服部征雄）